

37【街の散策からの気づき発見】

富多神社散策で神楽を考える

会員 K.T.

榎地区の榎灘子神楽を見にいった際、「榎の香取神社は神間地区の富多神社に合祀されている。」「祭りは、富多神社に安置されている神輿を榎に迎えることから始まり、神楽が終わって、神輿を戻すことで終わる。」と聞いた。富多神社を散策することにした。こじんまりとした境内には、りっぱな神楽殿を要している。ネットで、『埼玉県の神社を探す』から、「富多神社」の説明をみると、「当社は、富多村内に鎮座していた十二社を合祀して大正14年(1925)に新設され、富多神社と称した。(後略)」とある。

旧富多村は明治22年(1889)町村制施行により、神間村・上吉妻村・下吉妻村・小平村・櫛村・立野村・榎村の7村が合併し、中葛飾郡富多村が成立した。明治29年(1896)中葛飾郡と北葛飾郡が統合、北葛飾郡となった。昭和29年(1954)北葛飾郡宝珠村・南桜井村・川辺村と合併し、庄和村となった。昭和35年(1960)木崎・芦橋・倉常を編入、庄和39年(1964)町村制施行により、庄和町となる。庄和町は平成17年(2005)と春日部市と合併し、春日部市となった。現・富多地区が本格的に開発されたのは江戸川が開削された近世以降になる。このあたりは、農業地帯で水の管理や地縁関係が継続している地域だ。そのため神楽の民俗芸能が残っているのだろう。

神楽を調べたことがある。諸説あるも、神楽の語源は「神座(かみくら)」で、それが「かむくら」・「かぐら」と変化してきた、という。神座は神が降臨するところ、ここに神を招き、その前で魂の復活を願うなどの祈禱や歌舞をしたのが神代の時代の神楽の古い姿だった。神楽は神話の時代から登場しており、日本の芸能の始まり、といわれる。能の大家、世阿弥(1363～1443)の『風姿花伝』の著作の中に、神楽の由来が記されている。

「第四 神儀云(しんぎにいわく)

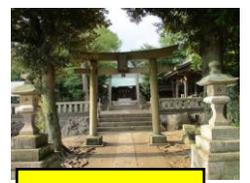
一. 申楽、神代の始まりといふは、天照大神、天の岩戸に籠り給ひし時、天下常闇になりしに、八百万の神達、天の香久山に集り、大神の御心をとらんとて、神楽を奏し、細男を始め給ふ。中にも、天の細女の尊、進み出て給ひて、櫛の枝に幣を付けて、声をあげ、ほどろを焼き、踏み轟かし、神憑りすと、歌ひ、舞ひ、かなで給う。その御聲ひそかに聞こえれば、大神、岩戸を少し開き給ふ。国土また明白たり。神たみの御面、白かりけり。その時の御遊び、申楽の始めと云々。委しくは口伝にあるべし。(後略)」

かつて、神楽という民俗芸能は、一つ一つの集落に存在していた。神楽の背景には、自然信仰・五穀豊穡・暮しの安全への祈りがあった。神楽は、神霊を鎮めるあるいは慰めるために演じたもので、神に捧げる舞踊であった。埼玉県立歴史博物館『神楽を楽しむ～埼玉の神楽入門』平成24年3月を引用すると、「(前略)関東地方でも様々な神楽が伝承されてきました。現在行われている神楽のほとんどは出雲流神楽であり、「お神楽」「太々神楽」「神代神楽」「里神楽」などと呼ばれ、人々に親しまれてきました。(中略)関東地区の神楽の特徴をあげると、神楽殿という独立した舞台が存在すること、形態が神楽舞と黙劇で構成されること、演目が神話に題材を求めていること、を挙げることができます。埼玉県の神楽も同じ特徴をもっています。各地で多くの神楽が伝承されており、かつ行われていたところや、祭り囃子の中で舞われる神楽を含めると150ヶ所以上確認されており、現在でも50ヶ所をこえて伝承されています。(後略)」

春日部市に江戸時代からの民俗芸能の神楽や囃子が伝承されていることは、貴重なことだ、と思う。少子高齢化、生活様式の変化、多様化する住民等で、従来の血縁・地縁の地域コミュニティは崩壊しつつある。未来へ持続可能な民俗芸能の伝承には、官・民・学校等、地域全体で支援することが必要だと思う。



富多神社参道



富多神社鳥居



富多神社本殿



大杉神社殿



神楽殿



年間祭礼